



作者^{しや}について



小林^{こばやし} 一茶^{いつさ}（一七六三—一八二七）

小林一茶は、江戸時代後期^{えど だい き}の俳人^{はい}です。信濃国^{しなのの}（今の長野県^{ながの けん}）で生まれました。

子どもや小さい動物^{どうぶつ}などへのやさしい気持ち^ものこめられた句^くをたくさんよんでいます。しょうがいには、二万句もの俳句をよみました。

他^{ほか}の作品^{ひん}



「名月^とを取^とつてくれろとなく子かな」

「やせ蛙^{がえる}負^まけるな一茶これにあり」

作者について



与謝蕪村（一七二六―一七八三）

与謝蕪村は、江戸時代中期の俳人、画家です。摂津国（今の大阪府）で生まれました。

二十さいのころ、江戸に出て絵画や俳句を学びました。各地を旅したのち、京都で、文と絵の両方をかく文人画家としてかつやくしました。美しい絵を見ているような句をたくさんよんでいます。

他の作品



「春の海終日のたりのたりかな」

「夏河を越すうれしさよ手に草履」

作者^{しや}について



高野^{たかの}素十^{すじゅう}（一八九三—一九七六）

高野素十^{いばらきけん}さんは、茨城県生まれの俳人^{はい}です。

医学^{いけんきゆう}の研究^{けんきゆう}をしながら俳句^{はいく}を学び、大正^{たいしょう}時代^{だい}から昭和^{しやうわ}時代^{だい}にかけてかつやくしました。自然^{ぜん}をよくかさつし、ありのままに句によみました。

作者^{しや}について



山口^{やまぐち}誓子^{せいし}（一九〇一—一九九四）

山口誓子^{たいしやうだい}さんは、大正時代^{たいしやうだい}から平成時代^{へいせい}にかけてかつやくした俳人^{はい}です。京都府^{きょうとふ}で生まれ、小学生^{しょうがくせい}のころから俳句^くを作^{はじ}っていました。が、大学^{だいがく}に入^{はい}ってほんかくてきに俳句^くを始^{はじ}めました。

はじめは、でんとうてきな俳句^くを作^{はじ}っていました。が、のちに近代^{てき}的なもの^{だいざい}を題材^{だいざい}にした新しい俳句^くを作るようになった。

作者について



松尾芭蕉（まつお ばしょう 一六四四—一六九四）

松尾芭蕉は、江戸時代前期の俳人です。伊賀国（今の三重県）で生まれました。

四十さいのころから各地を旅し、たくさん俳句を作りました。

すぐれた俳句をよみ、俳句をがいじゆつに高めました。江戸から東北や北陸を旅したときの紀行文『おくのほそ道』がよく知られています。

他の作品



「山路来て何やらゆかしすみれ草」

「閑さや岩にしみ入る蝉の声」

「荒海や佐渡によこたふ天の河」

作者について



正岡子規（まざおか しき）（一八六七—一九〇二）

正岡子規さんは、明治時代の俳人、歌人です。

伊予国（今の愛媛県）で生まれました。

『坊っちゃん』で知られる夏目漱石とは親友でした。
見たものをありのままに表す方法を俳句作りに取り入れました。病気とたたかいながら、俳句を作りつづけ、
たくさん俳句をのこしています。

他の作品



「赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり」

「団栗の共に掃かるる落ち葉かな」

作者^{しゃ}について



なかむら ていじよ
中村汀女（一九〇〇—一九八八）

中村汀女さんは、昭和^{しょうわ}時代の俳人^{はい}です。熊本^{くまもと}県^{けん}で生まれました。

台所^{どころ}での仕事^{しごと}や子ども^{こども}のことなど、家庭生活^{ていけい}を題材^{だいざい}にした句^くをたくさん作りました。

作者について



炭太祇（二七〇九―一七七二）

炭太祇は、江戸時代中期の俳人です。江戸（今の東京都）に生まれました。

四十さいをすぎたから長い旅に出て、その後は京都に住み、ひじょうにたくさんのお句を作りました。また、与謝蕪村と交流がありました。

他の作品



「山路来て向かふ城下や風の数」

「それぞれの星あらはるる寒さかな」

作者^{しや}について



まゆずみ
黛^{まい}まどか（一九六二—）

黛^{まい}まどかさんは、神奈川^{かながわ}県^{けん}生^{なま}まれ^れの俳人^{はいじん}です。

日本^{にっぽん}の文化^{ぶんか}を海外^{かいがい}にしようかいする活動^{かどう}などにも熱^{ねつ}心^{しん}に取り組^とんでいます。

